

管内育成預託農場で確認された乳頭糞線虫感染症の1事例

東部家畜保健衛生所 こじまともこ
小島朋子ほか

【はじめに】

乳頭糞線虫 (*Strongyloides papillosus*) は牛やめん羊の小腸に寄生し、特に子牛で重度感染すると突然死を起こすことが知られている (通称：子牛のポックリ病)。

【農場概要及び経緯】

当該農場は、搾乳牛 30 頭を有し、自家産子牛の他に預託育成牧場として同市内の複数農場から 2~3 か月齢の子牛を預かり 8 か月齢程度まで育成、その後は県外預託牧場に預託している (図 1)。なお、当該農場は子牛の導入時に呼吸器病関連ワクチンの接種及び駆虫薬の投与を実施している。

令和 6 年 11 月、2 か月前に転入した牛 (時点 4 か月齢) 1 頭が下痢、重度削瘦、起立不能を呈し、管理獣医師から予後不良と診断され、病性鑑定依頼があった。当該農場では同様の症状で数日前にも 1 頭が死亡しており、その他、同居する牛に発咳、下痢が散見された。

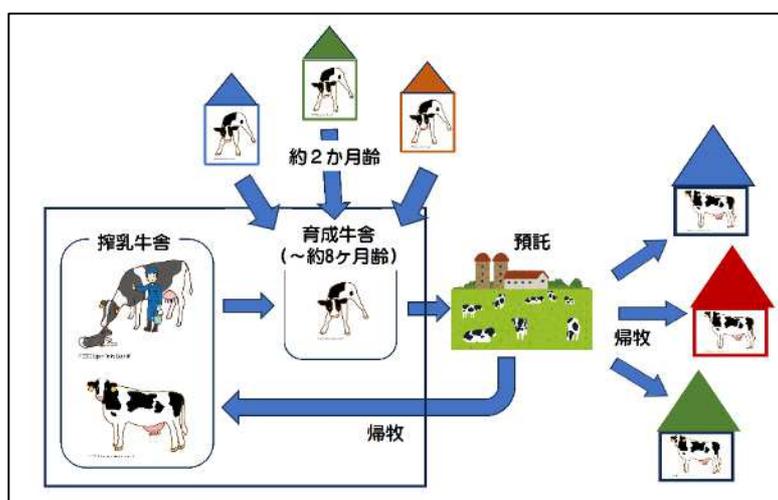


図 1 当該農場のカウフロー

【当該牛検査】

(1) 病理解剖：複数のリンパ節において腫大や出血を確認した。横隔膜には米粒大の白色結節が散在していた。心臓は心尖部に出血斑を確認、また右心室壁の菲薄化が確認された (図 2)。その他臓器に著変は認められなかった。

(2) 寄生虫検査：直腸内容から含子線虫卵を検出した (ショ糖浮遊法)。また、小腸内容の直接鏡検においても含子線虫卵を確認した (5,900EPG)。

(3) 病理組織学的検査：右心室壁の菲薄化が確認され、心筋細胞の微小変性・壊死が散見された (図 3)。

【同居牛検査】

虫卵形態から乳頭糞線虫を疑い、当該牛と同居していた子牛 10 頭について翌日糞便検査を実施した。その結果、10 頭中 6 頭（うち発咳を呈す牛 4 頭）で虫卵が確認されたため、駆虫薬の再投与を指示した。

再投与後は農場内における子牛の下痢等も治まり、1 週間後の糞便検査では 2 頭まで減少した。

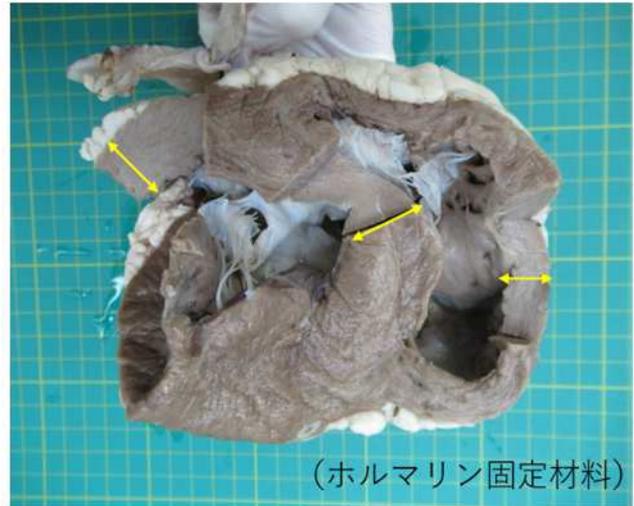
【まとめ】

当該農場は子牛の導入時に駆虫薬を投与していたが、今回、当該牛をはじめ同居牛を含む複数頭で虫卵が確認された。このことから、同時期に死亡した子牛についても乳頭糞線虫感染症が疑われた。

同居牛でみられた咳は乳頭糞線虫の生活環、気管型移行によるものと推察された。

また、死亡した子牛の転入時は天候が悪く、駆虫薬の効果が十分に得られなかった可能性が示唆された。

畜主に農場で実施している駆虫薬の投与方法について確認し、確実に投与するよう指導した。管内農家に対し、注意喚起と共に必要に応じて指導等していく。



	左心室壁	心室中隔	右心室壁
正常な牛	2	2	1
当該牛	3cm	2.7cm	1cm

図 2 右心室壁の菲薄化

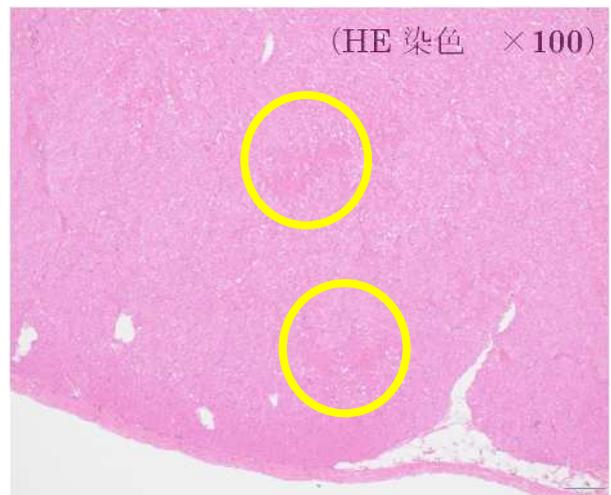


図 3 心筋細胞の微小変性及び壊死巣